

# オープニング

1878年——ヴィクトリア朝イギリス。産業革命から続く工業化・機械化の時代。新聞の片隅にこんな記事が載った。

「天才技師メルヴィル・ビギンズ、数年ぶりに館に客を招く！  
未発表の発明品を拝めるチャンスも!？」

ユニークな発想と、何よりも卓越した手先の器用さ——工作技術で名高い、技師にして発明家でもあるメルヴィル・ビギンズ。

彼の館の門は開かれた。

最終的にその門をくぐれたのは3人——つまり、あなた達だ。  
強運やあるいは多額の金銭でチャンスを掴み、  
あなた達は天才技師の館へと足を踏み入れた。

あなた達を迎えたのは、黒づくめの——顔以外の全身を一部の隙もなく  
黒い衣服で覆った、館の主・メルヴィルだった。

その晩、あなた達は館を見て回ったりメルヴィルと話したり、あるいは  
来客同士で話したりして過ごした。

その翌朝の10時頃、あなた達はチャイムの音で目を覚ます。  
この館に住んでいるという少女が帰宅したのだ。

あなた達は少女に話しかけるが、少女は一切返事をしない。

無言の少女と、未だに起きてこない館の当主。不審に思ったあなた達は  
研究室に向かい、そこで研究室の扉の鍵が開いていることに気付いた。  
昨夜メルヴィルは、研究に集中したいから、22時以降は鍵を掛けておくと言っていたはずなのに……。

扉を開ける。

そこにあったのは、切断されたメルヴィルの生首だった。

どさり、とあなた達の後ろで少女が崩れ落ちる音がした。  
衝撃が強すぎたのだろう。

そう思い彼女を研究室から遠ざけようとするが、彼女は足に力が入らないくせに、あなた達の手を借りて研究室の中に入ろうとする。

「仕方ないか……」

誰かがそう口にした。

少女の頑固さに負け、あなた達は彼女を研究室の中へ連れていく。

彼女はしかし、メルヴィルの死体を通り過ぎ、奇妙な機械の前で立ち止まった。  
彼女はその機械のスイッチを入れ、近くに落ちていた紙を拾い上げる。  
波形のようなものが書かれた紙だった。

彼女がこの館に着いてから初めて口を開く。

「待っていたよ……裏切り者の私を殺しに来たんだろう？」



# オープニング

突然のことで、あなた達は何が起きているのかわからなかった。しかし、聞いているうちに否が応でも理解してしまう。

どういう訳か彼女は、館の主・メルヴィルが殺される前に犯人と交わした会話を再現しているのだ。

メルヴィルの——被害者の言葉を再現した少女の声が続く。  
「メンバーの誰かと接触できればと考えていたが、まさかIRCの怪盗紳士その人がやってきてくれるとはな」

怪盗紳士と呼ばれた犯人が返す。  
「どうして私が怪盗紳士だと思うのです？」

「研究室の鍵は特注でね。君ぐらいじゃないと開けられないんだよ」

「.....ご聡明ですね。しかしならば何故、我々の情報をMI5に売ろうなどとしたのです。どうなるかは火を見るよりも明らかでしょうに」

「火中の栗を拾う必要があったんだよ。もちろん、本気で売る気はなかったがね」

「MI5と接触しようとしたことは認めるのですね」

「ああ.....だが、君に聞いて欲しいことが」

それ以上メルヴィルの言葉は続かなかった。「どさり」という彼が床に崩れ落ちたときの音まで、少女の声は再現する。

静まり返った研究室に、犯人の——IRCの怪盗紳士と呼ばれた人物の言葉を再現した、少女の声だけが響く

「残念です.....本当に。せっかくあなたはIRCを抜けられたのに」

それから、しばしの静けさの後、「パチ」という少女の声が続いた。ごく最近聞いた音——少女が目の前にある機械のスイッチを点けたときの音だ。おそらく、犯人がこの機械のスイッチを切ったのだろう。

音の再現を終えた彼女は、あなた達に振り返る。

気付けば、機械は新しい紙を吐き出していた。紙に書き出される波形は、彼女の声色に合わせて波打っている。どうやら、この機械は音を波形として記録するものらしい、とあなた達は理解する。

少女が口を開いた。

「私、音が読めるんです。犯人の声が誰のものかまではわかりませんが.....この情報で、犯人を捕まえられますか？」

こうして。警察が到着するまでの一時間限りの犯人探しが始まった。